大学入学者選抜におけるボランティア活動評価に関する考察

林　寛子

1　はじめに

近年、ボランティア団体の存在は重要性を増しており、個人のボランティア活動にも社会的関心が高まっている。ボランティアは、個人の「自己実現」や「人間形成」という意義が強調されるようになっており、ボランティア活動は社員の社会貢献活動として評価されたり、あるいは就職時や進学時に評価されたりする。また、高等学校や大学においては、ボランティア活動に係る学修の成果を単位認定するところもある。

ボランティア活動はこれまで大学入学者選抜においても評価されてきた。各大学は、2014年12月に公表された中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」を受けて、ボランティア活動を含む多様な活動の成果を合否判定において重視することが求められている。各大学における個別入試は、高校教育での学びを評価し大学教育に繋げるために大学入試改善を行うことになり、ボランティア活動等の評価をますます積極的に行うようになることが予想される。

現在進められている大学入試改革は、高校教育、大学教育、大学入学者選抜を一体とした大改革である。高校教育、大学教育において一貫してボランティア活動の拡大が図られようとしている。ボランティア活動を大学入学者選抜試験で評価の一つとして用いることは、高校教育と大学教育との学びの接続となるため、大学入学者選抜試験の改善の中で大学は、どのような入学者を受け入れようとしているのか、評価基準を明確に示していくことが求められている。

しかし、大学入学者選抜試験でボランティア活動が評価され、その評価がどのように行われるのか明確に志願者に示された場合、インセンティブが働き、新たに中学生、高校生のボランティア活動が増加する可能性がある。このことは中学生、高校生の社会参加を可能にすると考えられるが、その一方でこのボランティア活動は評価のためのボランティア活動として批判を集めることにもなるだろう。

今後、大学は高等学校における活動の実績としてボランティア活動などを大学入試において如何に評価するのか基準を設定し公表しなければならない。大学に求められている大きな流れは、ボランティア活動を入学者選抜で合否判定に活用することではあるが、導入の検討にあたり、大学がボランティア活動を入学者選抜試験で求める意義および、評価として活用することの可能性について検討する。

2　大学入試改革の動向

2014年12月22日に公表された中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」を受け、2015年初頭に文部科学大臣は「高大接続改革実行プラン」を発表した。高大接続システム改革会議が2月に発足し、「中間まとめ」が同年9月に発表された。この「中間まとめ」では、大きく変容する新しい時代に向けて、知識の獲得や再生を重視する教育から、「知識・技能」に加えて「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」（学力の3要素）を重視する教育へ変革する必要性が謳われ、大学入学者選抜の改革の方向性が示された。

具体的には、高等学校における教育改革の方向性の一つとして、多面的な評価の充実が掲げられた。「高等学校で学ぶ生徒の興味・関心・能力・適性等の多様化が進む中にあっては、生徒一人一人の意欲を喚起するとともに、多様な活動の機会を通じて、それぞれの生徒に成長のきっかけを与えていくことが必要であるとし、高等学校段階においては日々の授業に加え、運動・文化部活動や生徒会活動、ボランティア活動、各種大会、就業体験等様々な活動がおこなわれているところであるが、このような日々の活動を通じた幅広い資質・能力について多面的な評価を行っていくことが重要である。」（文部科学省高大接続システム改革会議 2015: 12）と示されている。

この高等学校における教育改革を受け、大学入学者選抜改革は、学力の3要素を多面的・総合的に評価するものへ転換することが求められている。個別大学は主体性を持って、多様な人々と協働して学ぶ態度を多面的・総合的に評価するために、ボランティア活動・部活動等の多様な活動の成果を含めて、高等学校を卒業するまでに生徒一人一人が積み重ねてきた学習履歴等を合否判定において重視すること等が求められている。

ボランティア活動が大学入学者選抜試験で評価の一部として用いられることは、これまでも行われてきた。ボランティア活動の活動実績として、ボランティア証明書や活動報告書、志望理由等で活動の状況を大学が把握できるように制度設計している大学入試がみられる。しかし、ボランティア活動の状況がどのように入学者選抜試験の選考で利用され、合否にどれほど影響を及ぼしているのかは明確ではない。

大学は大学入学者選抜改革のなかで、アドミッションポリシーに則った公平・公正な新たな入試システムを構築し、それに基づいて志願者の評価を行うことを社会に示すことが求められている。高校教育における多様な学びの一つとしてボランティア活動を大学が評価する方向で入試改革を進める場合、どのようなボランティア活動をどのように評価するのか各大学が明確にアドミッションポリシー及び募集要項等で示す必要が生じる。しかし、ボランティアは活動期間、活動内容、活動者の役割、活動への参加理由などがさまざまで、大学がどのようなボランティアをどのように評価するのか検討が求められる。

大学入試でボランティア活動に対する評価がどのようなものなのかを明確に示した場合、高等学校以下の教育に影響を及ぼすこともあるだろう。また、高校生ボランティアの受け皿となる可能性の高い地域社会の状況の検討が必要になるであろう。それ以上に、ボラン

ティア活動を大学入学者選抜試験の評価に用いることについて、受け入れ側である大学関係者の理解が得られるかも重要な課題である。

3　高等学校におけるボランティア活動

3.1　日本におけるボランティア活動の位置づけ

ボランティア活動には、支援の対象者に直接働きかける活動とボランティア団体等の組織運営を支える活動がある。組織運営を支えるためのボランティア活動には、手伝いとしての軽作業から、専門的な知識やスキルを必要とする専門家によるボランティアまである。また、資金支援としての募金活動も組織運営を支えるためのボランティア活動である。

ボランティア活動について、生涯学習審議会は「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について（答申）」（1992 年 8 月）の中で「ボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献することであり、ボランティア活動の基本的理念は、自発（自由意思）性、無償（無給）性、公共（公益）性、先駆（開発、発展）性にあるとする考え方が一般的である。」（文部科学省生涯学習審議会 1992）と説明している。ボランティアの特徴は、自発性、無償性、公共性、先駆性にあると言える。

日本のボランティアの歴史的変化について、中央社会福祉審議会の意見具申「ボランティア活動の中長期的な振興方策について」では、福祉国家以前にあっては、ボランティアは極めて限られた人々が慈善的精神により行う行為であり、対象は恵まれない人々であった。その後、福祉国家を目標とした時期には公的責任が重視され、ボランティアには公的施策に対する残余的な役割が期待された。しかし福祉国家の体制が、社会保障の充実とともに次第に整備されるにしたがって、その基本的性格には変化はないものの、活動の動機や機能という点で従来とは異なる意義が強調され、かつての慈善や奉仕の心にとどまらず、より広がりを持った地域社会への参加や自己実現、さまざまなことをお互いに学び経験し、助け合いたいという共生や互酬性に基づく動機に変化して、活動の範囲もさまざまな領域に及び、活動する人々も増加していった（中央社会福祉審議会 1993: 195-6）と整理している。

日本のボランティア活動は、1970 年代以降福祉の見直しとして小さな政府への移行が進められる状況の中で、厚生省や文部省を中心に政策として重点が置かれた。行政主導でボランティアが推進され、学校教育においてはボランティア教育が展開された。学校教育においてボランティア活動が行われる場合、ボランティア活動は自発的あるいは主体的にボランティア活動が行われることよりも、活動を通して得られる結果としての効果に注目が置かれ、生きがいづくり、人間形成、自己実現といったボランティア活動の効果が強調されてきた（仁平 2002）。

1970 年代以降のボランティア政策は、ボランティアの位置づけを従来のボランティアの慈善や奉仕の心に基づく活動から、助け合いたいという共生や互酬性に基づく活動へと位置づけを変化させ、地域社会への参加や自己実現、さまざまなことを学び経験する活動と

してボランティアを拡大させたのである。

3.2　高等学校におけるボランティア活動の取組み

では、高等学校におけるボランティア活動の取組みはどのような現状なのだろうか。山口県の高等学校教育におけるボランティア活動の取組みを見てみる。山口県教育委員会高等教育課は、高校生とボランティアの受入先とをつなぎ、高校生のボランティア活動を支援するために2013年8月に山口県ボランティアバンクを設置し、地域における高校生のボランティア活動の活性化を図るとともに、高校生の社会参加を図っている。

ボランティアバンクの設置にあたって山口県教育委員会は、「ボランティア活動は、高校生が社会の一員であることを自覚し、互いが支え合う社会の仕組みを考える上で意義があると同時に、自己のよさや可能性を見出し、自分自身を高める上でも大きな教育的効果があります[1)]」とボランティア活動に対する評価を示している。ここにボランティア活動をとおした高校生の自己実現を期待していることが示されている。

山口県のボランティアバンクの仕組みは図1、図2のとおりである。ボランティア活動を希望する高校生は、ボランティアバンクに登録する。高校生ボランティアを要請したい者は、社会福祉協議会を通じて要請をする。この社会福祉協議会を通じたボランティア要請の場合、高校生のボランティア派遣を要請する受け入れ先は、活動日の1か月前までに「高校生ボランティア派遣要請書」をボランティアバンク（山口県教育委員会）に提出することになっている。ボランティアバンクは、受入先からボランティア派遣の要請を受けて高校へ照会する。高校はボランティアの内容を確認した上で活動を行う場合は受入先と事前打合せを行い、生徒を派遣させることになる。活動終了後、高校は「ボランティア活

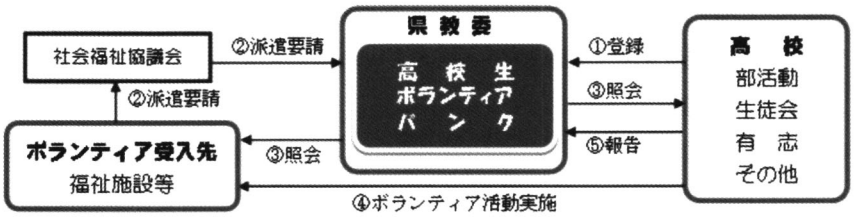

図1　山口県ボランティアバンクの登録から活動までの流れ
（社会福祉協議会を通じたボランティア要請の場合）

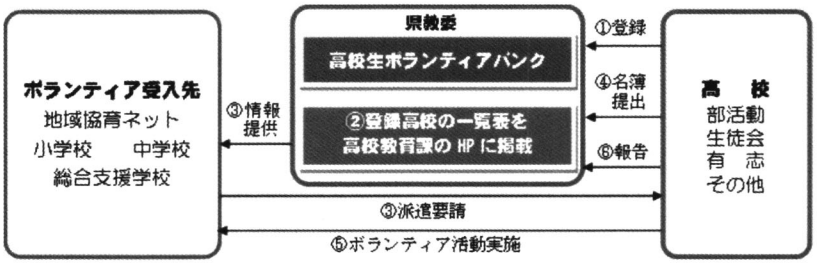

図2　山口県ボランティアバンクの登録から活動までの流れ
（地域協育ネットからのボランティア要請の場合）
出所）山口県高校教育課ボランティアバンクトップ　http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50300/v-bank/

動実施報告書」をボランティアバンクに提出することになっている。

もう一つ、高校生のボランティアを要請するルートが設けられている。これは、山口県の地域の小学校、中学校および総合支援学校からの要請に応えるルートである。山口県は地域協育ネットとして、幼児期から中学校卒業程度までの子どもたちの育ちや学びを地域ぐるみで見守り支援するために、概ね中学校区を一まとまりとした仕組みを作っている。この地域協育ネットは、高校生ボランティアを要請したい場合、活動日の 1 か月前までに「高校生ボランティア派遣要請書」を高校へ直接提出することになっており、高校はボランティアの内容を確認した上で、活動する場合は活動の 10 日前までに、ボランティア参加者名簿をボランティアバンクに提出し、ボランティア活動が行われた後は、「ボランティア活動実施報告書」をボランティアバンクに提出することになっている。

山口県ボランティアバンクを介した高校生のボランティア活動は、社会福祉協議会が実施しているボランティア活動への参加、福祉施設における介助補助、清掃、レクリエーション、公共施設や地域での清掃ボランティア、地域協育ネットに所属する各種団体が主催する行事への参加、学校の教育活動や地域で行う活動が主たる活動内容となっている。

ボランティアバンク設置時の 2013 年は、19 校、298 人による登録から始まったが、2014 年度は 29 校 649 人の生徒が活動をしている。バンクに登録している生徒は、主に生徒会役員、ボランティア部あるいは青少年赤十字（JRC）部、インターアクト部という名称のボランティア活動を行う部活動が中心であった。なお、2014 年の山口県の高等学校の数および生徒数は平成 26 年度教育統計調査結果報告書によると 81 校、35,340 人で、山口県ボランティアバンクへの登録校の割合は 35.8%、登録している高校生の割合は 1.8%であった。さらに、2015 年度の登録校および登録生徒数は、36 校 1,581 人に増加している。2015 年の山口県の高等学校の数および生徒数は平成 27 年度学校基本調査結果速報によると 80 校、35,133 人で、山口県ボランティアバンクへの登録校の割合は 45.0%、登録している高校生の割合は 4.5%に上昇した。

2015 年は注目すべき点が生じている。登録校のうち 2 校が全生徒を登録している。今後、ボランティアバンクの登録状況は、生徒会役員、部活動を単位とした活動ではなく、学校全体の取組みとして登録者が増加する可能性がある。

現状では、高校生のボランティアバンクの登録は部活動単位が多いことから、ボランティアバンクに登録している高等学校のボランティア関連の部活動の内容を確認した。高校生のボランティア関連の部活動は、表 1 のように、募金活動、清掃活動、ペットボトルキャップ収集、福祉施設訪問、地域イベントの手伝い、そして日本赤十字社との関わりのある青少年赤十字部では献血推進活動が行われている。

高校生のボランティア活動は、子育て支援や福祉イベントの手伝い、障害者との交流など支援の対象者に直接働きかけるボランティア活動も見られるが、募金活動、清掃活動、ペットボトルキャップ収集活動、献血推進活動といったボランティア団体等の組織運営を支えるボランティア活動の比重が高いようである。

表１　山口県の高等学校におけるボランティア関連部活動の活動内容 2)

A 高等学校	（１）募金活動・・・・・・ (a)アフリカ干ばつ緊急支援活動(ユニセフへ) (b)カンボジア地雷撤去支援活動(CMC へ) (c)24 時間テレビ「愛は地球を救う」など （２）ペットボトルキャップ収集活動・・・・これまでワクチン 400 人以上分を送付 （３）献血推進活動・・・・献血ボランティアなどに参加 （４）研修活動・・・・赤十字創始者アンリ・デュナンの人形劇上演、点字・手話の学習 （５）通学路清掃活動・・・・毎月１回地下道など （６）その他・・・・花壇の花植え、総合支援学校との交流会参加など
B 高等学校	校内・校外においてのボランティア活動を展開しています。青少年赤十字活動（JRC 活動）・献血推進活動・子育て支援活動などに加え、地域の清掃活動や夏祭り補助ボランティア活動などを行ったりしました。
C 高等学校	活動としては、地区 JRC 活動への参加（清掃活動、研究会）、24 時間テレビ募金活動、献血や麻薬撲滅キャンペーン、学校周辺の清掃活動などが挙げられます。
D 高等学校	学校内では周辺地域の清掃活動を行っています。校外では高校生ボランティアバンクに登録しており、児童センターでのイベントの手伝いをしています。 また献血推進キャンペーンや募金活動、ボランタリーサービス、救助法の学習など「気付き、考え、行動する」という赤十字の精神に近づけるよう、日々努力しています。
E 高等学校 （H26 活動実績）	○県下一斉 V･S*（5/2）　　*V･S：ボランティアサービス ○春の福祉まつり手伝い（4/29） ○青少年赤十字東部地区 TC*（8/2）　　*TC ：トレーニングセンター ○しゅうなん子どもゆめクラブ ・思い出をかざろう（7/26 ） ・夏を味わおう（8/7） ・動物たちとふれあおう（10/25）
F 高等学校	韓国ホームステイなどを通して国際理解を深めること、清掃活動や募金活動などのボランティア活動に参加すること、施設を訪問して障害者との交流を行い、相互理解をすることなどが主な活動内容です。

4　諸外国の大学入試におけるボランティア活動評価

高校生のボランティア活動に対して大学がどのような評価が可能なのか、諸外国のボランティア活動評価を参考にしてみる。ボランティア活動のあり方は、それぞれの国の歴史や宗教、文化、政治状況等のさまざまな要因に影響されるため、ボランティア活動が学校教育で行われているか、大学入試において評価として活用するかは国によって違う。

「諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究報告書」によると、ボランティア活動を国づくりに積極的に活用しようとする姿勢は、アメリカやイギリスにおいて顕著で、アメリカは建国以来ボランティア精神を国の基礎として重要視しており、歴代の政権の重要な政策課題の一つで、特に次世代を担う若者の市民教育の重要な場としてボランティア活動が認識されており、イギリスは国有化路線と市場万能主義のどちらにも属さない第三の道としてボランタリーセクターと官との新しいパートナーシップが重要視され、若者のボランティア活動を促進する施策が展開されているが、キャリア教育の意味合いが若干強いと報告されている。また、ボランティア活動の成果を定性的に把握している調査国は多いが、定量的な評価手法の開発に成功し、それを評価基準として使っている国はなかったと報告されている（文部科学省 2007: 3)。

それでも、ボランティア活動に関するデータ整備や評価が最も進んでいるのはアメリカであるとして、アメリカの状況が紹介をされている。アメリカでは、ボランティア活動の活動者数、参加状況、活動分野と内容、参加の理由などについての全米調査をアメリカ労

働省が定期的に実施している。また、ボランティア活動の振興機関である Corporation for National and Community Service のボランティア活動の担当部署である Learn and Serve America は、大学に委託して効果的なボランティア活動のプログラムと学業成績との関連を調査したり、州レベルで実施している評価結果の集約を行ったりしている。大学等の研究機関においても、ボランティア活動の教育的効果を、社会科学的手法を用いて測定することが研究テーマとなっているという。

そして、最大の課題であるボランティア活動の大学入試における評価についてであるが、報告書によるとボランティア活動から得られる成果を教育分野に活用しようとする試みが、アメリカ、イギリス、韓国で積極的にみられるという。

アメリカではサービス・ラーニングとしてボランティア活動が小・中・高等学校及び大学で盛んであり、イギリスにおいても中等教育においてシチズンシップ教育が義務化され、その一環としてボランティア活動をカリキュラムに取り入れる学校がある。韓国は、学校教育課程においてボランティア活動が義務化されており、教科外活動領域である特別活動の中にボランティア活動が導入されているという。

韓国のボランティア教育の義務化は、1995 年にソウル市教育委員会によって、中学校教育課程に一定のボランティア時間を卒業の要件とするボランティア教育プログラムが初めて導入されたことにはじまり、その後の第 7 次教育課程改革でこのボランティア教育プログラムは韓国全土の中等教育課程で必修化された（小澤 2013: 188)。なお、ボランティア活動の結果は、ボランティア活動時間数を評価して点数化し、総合学生生活記録簿（いわゆる調査書）に掲載される（諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究実行委員会 2007: 272)。

韓国は大学入試の受験競争が激しく、改善をはかるため受験競争を緩和し、高校教育を正常化させようと入試改革に取り組んでいる。2007 年には日本の AO 入試に似た「入学査定官」（アドミッション・オフィサー）制度による入試が行われるようになり、2009 年に本格的に導入された。入学査定官制度による入試の評価はそれぞれの大学が設定した多様な資質・能力を総合的に評価している。総合学生生活記録簿による教科の成績や特別活動の記録、自己紹介書、推薦書、面接によって、単に学習成績だけではなく、創造性や思考力、専門領域への適性を判定し、合否決定に反映させている。韓国の入学査定官制度入試は、日本の AO 入試のように学力以外の要素を含めた多面的､総合的な評価による入試のため、現在、入学者の学力不足が指摘されているという。しかし、高等学校における授業態度が積極的になった、職業体験・ボランティアが増えたなど受験競争緩和、高校教育正常化への効果はあったとの評価もあるという（朴・石井 2013)。

5　ボランティア活動が大学教育にもたらす効果

5.1　若者のボランティア意識の国際比較

内閣府は平成 25 年に日本、韓国、アメリカ、英国、ドイツ、フランス、スウェーデンの

満 13 歳から満 29 歳までの若者を対象として、各国 1,000 サンプル回収で「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」を実施している。この調査における「ボランティア活動に対する興味」（図 3）では、アメリカ（61.1%）が最も高く、次いで韓国

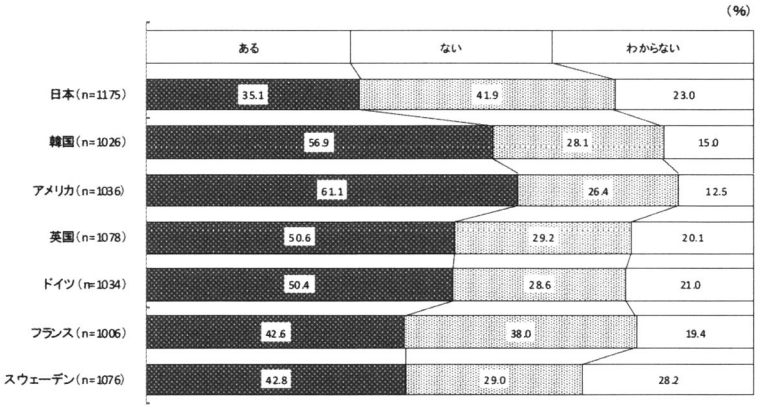

図 3　ボランティアに対する興味

出所）内閣府「平成 25 年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」

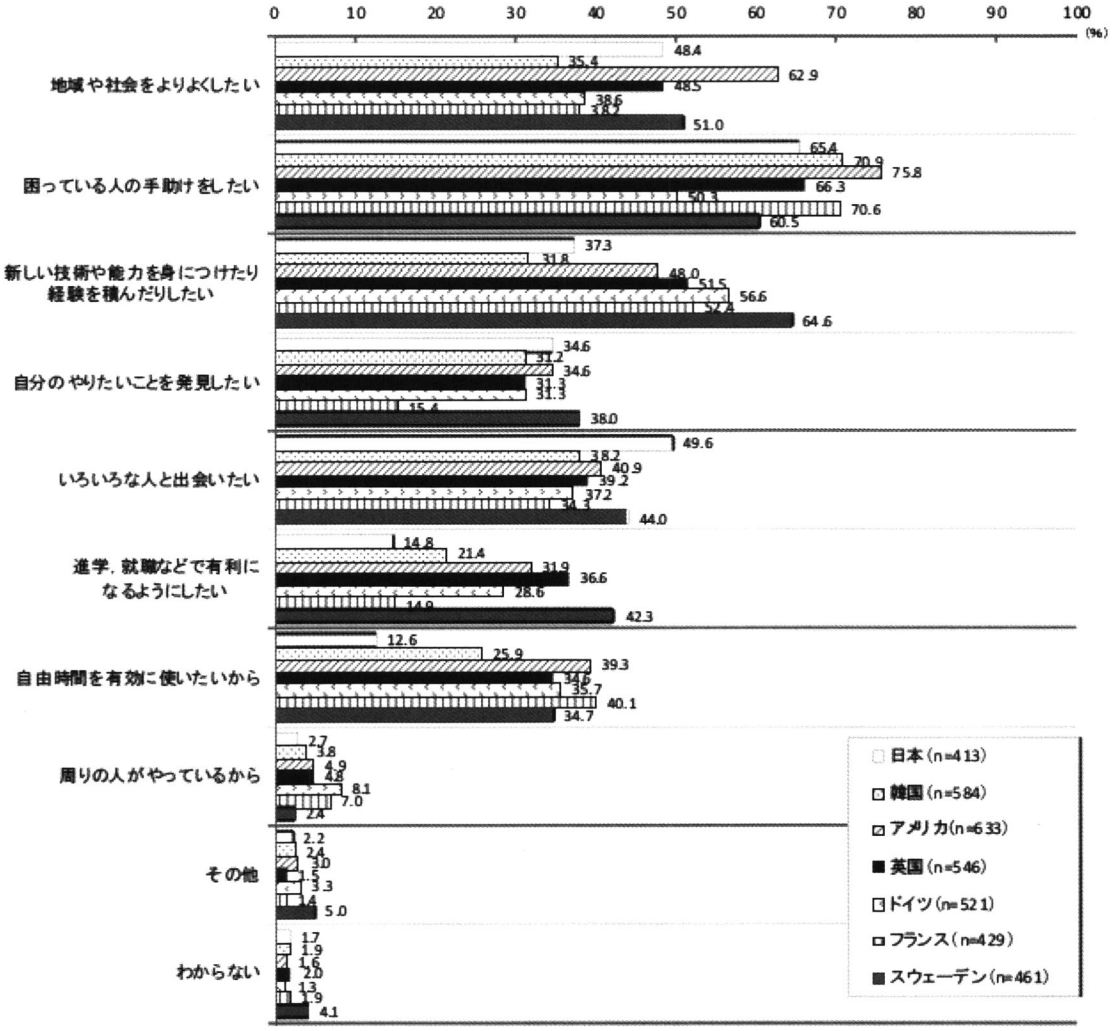

図 4　ボランティア活動に興味がある理由

出所）内閣府「成 25 年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」

（56.9%）、英国（50.6%）となっている。ボランティア活動から得られる成果を教育分野に活用しようとする試みが積極的な国において、若者のボランティア活動に対する興味も高い。

日本の若者が「ボランティア活動に興味がある理由」（図 4）は、「困っている人の手助けをしたい」が 65.4%で最も高く、以下「いろいろな人と出会いたい」（49.6%）、「地域や社会をよりよくしたい」（48.4%）、「新しい技術や能力を身につけたり経験を積んだりしたい」（37.3%）、「自分のやりたいことを発見したい」（34.6%）の順となっている。「進学や就職に有利になるようにしたい」に注目すると、スウェーデン（42.3%）、イギリス（36.6%）、アメリカ（31.9%）の割合は高いものの、韓国（21.4%）の割合は低い。

韓国は日本と違ってボランティア活動に興味がある者が多いが、ボランティア活動に興味がある理由は、総合学生生活記録簿（調査書）に点数化された評価が付くことによる「進学や就職に有利になるようにしたい」という理由よりも「困っている人の手助けをしたい」（70.9%）が最も高い状況にあった。入試にボランティア活動が評価として用いられたとしても、入試を理由としたボランティア活動の取組みには至らないように思われる。

5.2　大学におけるボランティア活動の効果

ボランティア活動は、ボランティア活動に取り組むときの主体性や自主性よりもボランティア活動の結果もたらされる効果が自己実現として強調されている。ボランティア活動の経験が、大学入学後の学業成績や卒業後の進路に教育効果として影響を及ぼしているのか、山口大学の学生のボランティア活動の効果について検討する[3)]。

山口大学では入学者追跡調査の一環として、入学時と卒業時に学籍番号の記入を求めた全学生対象のアンケート調査を行っている。アンケート調査に学籍番号を求めるのは、入学時と卒業時の実態や意識をただ把握するだけでなく、入試成績、在学中の学業成績等とも結び付けて分析するためである。分析は、2010 年入学者 2,013 人から 6 年制の学部生を除いた 1,874 人のうち 4 年間で卒業した 1,518 人を対象として卒業時調査を行い、入学か

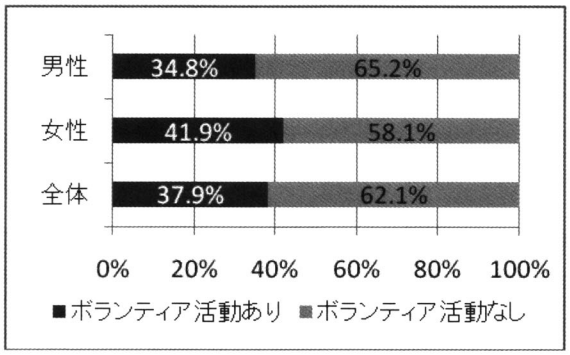

図 5　性別ボランティア活動の有無
（n=1092）

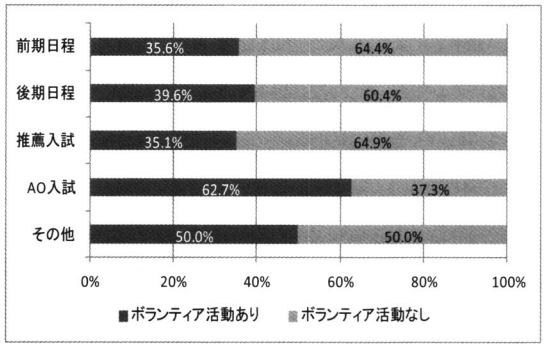

図 6　入学区分別ボランティア活動の有無
（n=1095）$\chi^2=21.907$　df=4　p=0.000

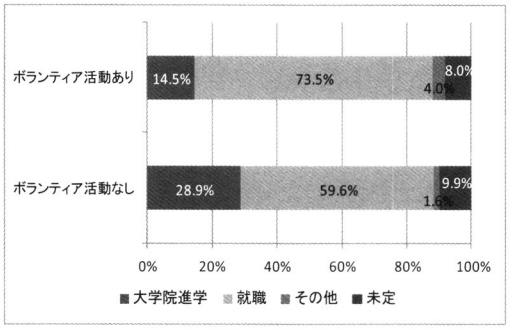

図 7　ボランティア活動の有無別
大学卒業後の進路
(n=1157)　χ^2=38.655　df=3　p=0.000

表 2　ボランティア活動の有無と学業成績

		度数	平均	F	有意確率
GPA	活動あり	427	2.62	10.464	.001
	活動なし	730	2.52		
TOEIC 最高得点	活動あり	427	477.92	.346	.556
	活動なし	729	474.81		
TOEIC 初回得点	活動あり	427	447.97	.565	.452
	活動なし	729	443.68		

ら卒業までのデータを結合したデータを用いる。2010 年入学者のうち 4 年間で卒業した学生の 37.9%がボランティア活動を大学時代に行って卒業している(図 5)。

入学区分別ボランティア活動の有無（図 6）では、AO 入試による入学者が大学時代にボランティア活動を行っている割合が高い。

ボランティア活動の有無別大学卒業後の進路（図 7）は、大学時代にボランティア活動を行った学生が就職者の割合が高く、大学院進学者の割合が低い。未定者を見た場合には、ボランティア活動の有無別ではほぼ同程度の割合であった。ボランティア活動の有無と大学入学後

表 3　ボランティア活動の有無と大学で養われた資質・能力

		度数	平均	F	有意確率
社会生活を営む上で求められるマナーが身についている	活動あり	427	2.74	17.537	.000
	活動なし	730	2.54		
社会問題への関心が高く、幅広い知識・教養を身につけている	活動あり	408	2.76	11.797	.001
	活動なし	708	2.59		
自分の考えを他人にわかりやすく話すことができる	活動あり	427	3.04	23.715	.000
	活動なし	729	2.80		
自分の考えを文章を用いて的確に表現することができる	活動あり	407	2.92	6.927	.009
	活動なし	706	2.79		
自分の考えや論理を他人にわかりやすくプレゼンテーションすることができる	活動あり	427	2.95	5.035	.025
	活動なし	730	2.85		
他人の発言や発表内容を素早く的確に理解することができる	活動あり	409	2.92	.631	.427
	活動なし	707	2.88		
物事を筋道立てて論理的に考察することができる	活動あり	427	3.16	4.910	.027
	活動なし	730	3.07		
細かいことにとらわれず、的確に全体的な判断を下すことができる	活動あり	409	3.26	6.152	.013
	活動なし	707	3.15		
成果をあせらずに、地道な努力を積み重ねることができる	活動あり	427	3.07	6.383	.012
	活動なし	730	2.96		
周囲の雑音を気にせずに、研究や仕事に長時間取り組むことができる	活動あり	409	2.92	6.174	.013
	活動なし	708	2.80		
困難に直面活動ありとき、冷静に打開策を見出すことができる	活動あり	427	3.03	21.504	.000
	活動なし	729	2.80		
不明なこと、理解できないことは納得できるまで追究する	活動あり	408	3.20	17.865	.000
	活動なし	704	2.98		
既存の概念にとらわれず、新しいものを生み出そうとする意識が高い	活動あり	426	3.05	22.544	.000
	活動なし	727	2.85		
何事にもチャレンジ精神が旺盛である	活動あり	404	3.02	7.767	.005
	活動なし	701	2.89		
自分の欠点を自覚し、常に改善の努力を続けている	活動あり	426	2.70	.360	.549
	活動なし	727	2.67		
他人と協力しながら、研究や作業を進めることができる	活動あり	407	2.77	.080	.778
	活動なし	704	2.79		
周囲の意見や風評に流されることなく、善悪の判断ができる	活動あり	426	2.77	2.584	.108
	活動なし	725	2.70		
交友関係が豊かである	活動あり	409	2.87	.728	.394
	活動なし	701	2.83		
指示されなくても、自分で判断して行動ができる	活動あり	427	2.83	6.631	.010
	活動なし	726	2.72		
新しい機器類の操作を学んだり、率先して新しい技術を覚え、必要に応じた活用が十分できる	活動あり	408	2.92	14.314	.000
	活動なし	702	2.75		
必要とする情報や未知の知識を得るための手段や方法をよく知っている	活動あり	427	2.87	10.507	.001
	活動なし	729	2.74		
他人の意見・行動に根拠ある批判ができる	活動あり	409	2.94	6.496	.011
	活動なし	705	2.83		
与えられた前提、条件から結論を推論することができる	活動あり	427	2.64	19.231	.000
	活動なし	730	2.41		
リーダーになって集団をまとめることができる	活動あり	409	2.78	18.820	.000
	活動なし	705	2.54		

の学業成績の関連（表 2）は、ボランティア活動を行った学生が GPA は高かった。TOEIC の成績については、ボランティア活動の有無は影響していない。

卒業時に自己評価という形で、大学で養われた資質・能力評価を 24 項目について確認している（表 3）。大学時代に養われた資質・能力はボランティアの活動の有無と関連が見られないのは網掛けのない 5 項目だけで、多くの資質・能力項目で、ボランティア活動をした学生が大学時代に資質・能力が養われたと自己評価している。大学時代にボランティア活動を行った学生は、大学教育における学業成績が高く、大学教育における成長が十分にもたらされた学生と言える。

6 まとめ

本稿では高等学校におけるボランティア活動を大学入学者選抜試験において評価し、高校教育における学びを大学教育に繋げていくための方向性を検討するために、諸外国の状況を確認し、大学教育におけるボランティア活動の効果を確認した。

山口大学の学生のボランティア経験と大学卒業後の進路や学業成績との関連、大学で養われた資質・能力との関連の分析から、ボランティア活動は学生の成長をもたらし、大学教育に効果が期待できると言えるだろう。そのため、ボランティア活動に関わろうとする入学者を獲得していくことは、大学教育にとって有効と言えるであろう。

今後、個別大学でボランティア活動の評価を大学入学者選抜試験で用いようとすれば、入試業務の省力化や評価の観点から、ボランティア活動を得点化して評価することが最も好ましいであろう。韓国のボランティア活動の活動時間の得点化は、今後の検討に示唆を与えるものであった。

大学入学者選抜におけるボランティア活動評価は、韓国が国のボランティア活動の義務化の中で得点化しているに対し個別大学の取組みとしての得点化が可能なのか、学校教育において義務化されていない活動をどのように証明していくのか、ボランティア活動に従事した時間だけをポイント化することが好ましいのか、さらに、ボランティア活動を得点化して評価することが、現在指摘されている AO 入試等の大学入試センター試験を課さない特別入試による入学者の学力不足という課題に対して、大学関係者や志願者の不安をあおらずボランティア活動の評価の有効性を説明することができるのかなど課題はある。

しかし、日本においても近年、各自治体の県（市）民活動センター等で、ボランティア活動の評価までは及んでいないが、ボランティア活動の団体の把握及び団体の活動の情報発信が行われ、ボランティア活動の活動者数、参加状況、活動分野と内容等が整理されて広く一般に公開されている。大学においてはアメリカの大学の研究を受けて、ボランティア活動や地域との協働の活動について大学評価が行われ始めている[4]。ボランティア活動を把握し、評価する動きは着実に進んでおり、大学入学者選抜にボランティア活動評価を得点化し、活用していくことは可能であろう。

［注］

1) 山口県　報道発表 2013 年 8 月「山口県高校生ボランティアバンクの設置について」, http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/press/201308/025653.html（2015 年 12 月 15 日取得）.

2) 登録校のうち高等学校のホームページの部活動紹介として記載のある高校で、登録人数の多い高校 6 校を取り上げた。
http://www.ube-c.ysn21.jp/62_09jrc.html.
http://www.saikyo-h.ysn21.jp/02syoukai/bukatsu/bunka/05volunteer.htm.
http://www.yamaguchi-h.ysn21.jp/zennichi/bukatsudo/7%20jrc.html.
http://www.yamaguchichuo-h.ysn21.jp/bukatsu/bunka.html.
http://www.sinnanyo-h.ysn21.jp/bukatudo/jrc.htm.
http://www.kagawa-h.ed.jp/index.php/index.php/index.php/culture.html.

3) 山口大学アドミッションセンターで蓄積しているデータを用いる。使用規則に従ってデータを使用し、分析は大学全体で行う。

4) サービス・ラーニングの試み及びその教育効果に関する論文がみられる。

［文献］

朴賢淑・石井光夫, 2013,「韓国の大学入試改革と学力保障」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』8(2013): 13-26.

厚生省, 1993, 中央社会福祉審議会の意見具申「ボランティア活動の中長期的な振興方策について」1993. 7: 193-202,（2015 年 12 月 20 日取得, http://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryou/no.13/data/shiryou/syakaifukushi/475.pdf).

文部科学省, 2007,「諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究報告書」,（2015 年 12 月 20 日取得, http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/07101511.htm 第 2 章).

文部科学省中央教育審議会, 2014,「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申)」,（2015 年 10 月 28 日取得, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyochukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf).

文部科学省高大接続システム改革会議, 2015,「中間まとめ」,（2015 年 10 月 28 日取得, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/033/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/09/15/1362096_01_2_1.pdf).

文部省生涯学習審議会, 1992,「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について（答申)」,（2015 年 12 月 20 日取得, http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19920803001/t19920803001.html).

内閣府, 2014 年,「平成 25 年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」,（2015 年 12 月 20 日取得, http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b2_2.pdf).

仁平典宏, 2002,「戦後日本における『ボランティア』言説の転換過程――『人間形成』レトリックと＜主体＞の位置に着目して」『年報社会学論集』15: 69-81.

小澤亘, 2013,「日本・韓国・カナダ 3 カ国における青年ボランティア文化比較研究――市民社会とボランティア問題」『立命館大学人文科学研究所紀要』99: 183-212.

社会福祉法人山口県社会福祉協議会山口県ボランティアセンター, 2015,「ボランティアセンターだより」54.

諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究実行委員会, 2007,「諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究報告書」.

山口県「平成 26 年度教育統計調査結果報告書」,（2015 年 12 月 20 日取得, http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/8/7/b/87b594fabc818f6a4098054368b87e74.pdf).

山口県「平成 27 年度学校基本調査結果速報（概要)」,（2015 年 12 月 20 日取得, http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/press/201508/031748_f1.pdf).

山口県高校教育課　ボランティアバンクトップ,（2015 年 12 月 20 日取得, http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50300/v-bank/).

山口県 報道発表 2013 年 8 月「山口県高校生ボランティアバンクの設置について」,（2015 年 12 月 20 日取得, http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/press/201308/025653.html).

所属：山口大学アドミッションセンター

E-mail アドレス：hiroko.h@yamaguchi-u.ac.jp